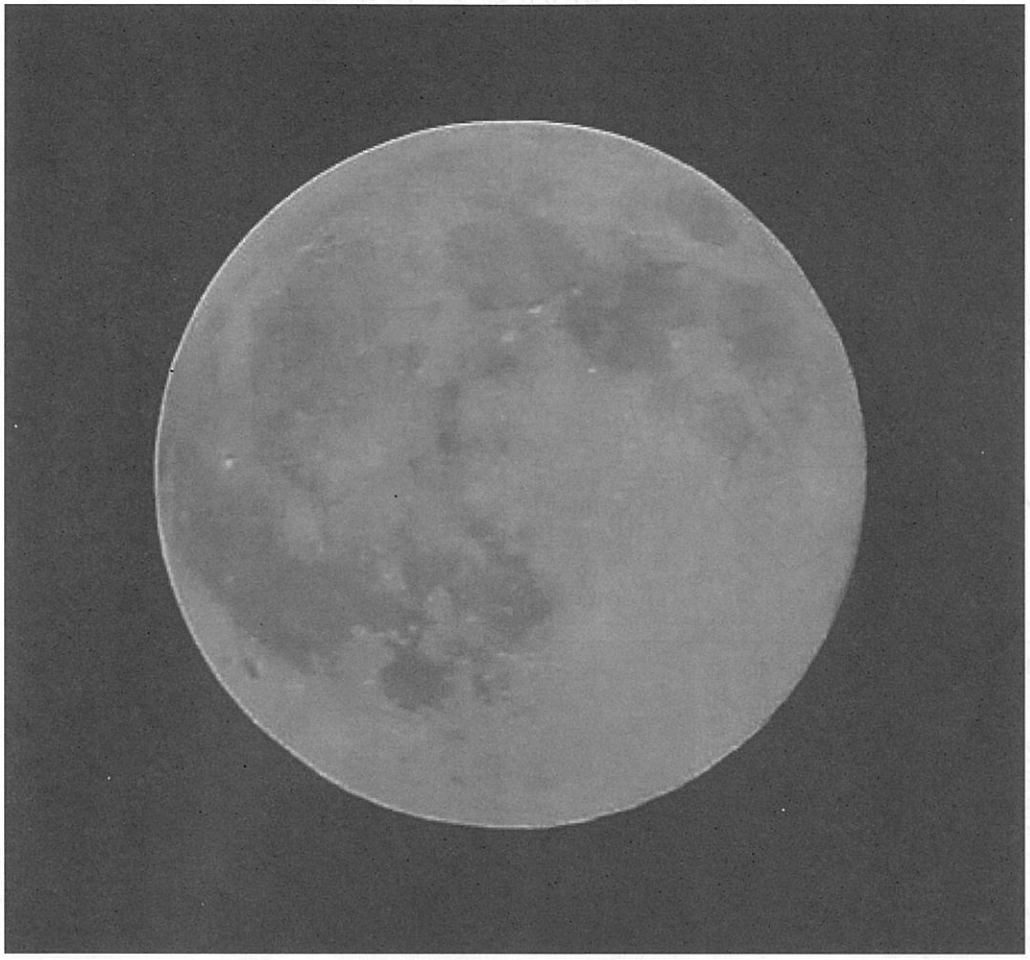


蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘
〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-32-2811
◆スタッフ◆
小林国二・小林善秋・高橋潔・室賀清輝
高橋利春・加瀬由紀子・屋代健
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社

ご家族の皆さまでご覧ください

「秋と月」

翠巖　弘

今年の夏は全国的に猛暑、「今日も暑いですね」の挨拶ではじまる毎日でしたが、八月のお盆と同時に涼しくなりはじめました。九月にはいるとまさに秋だと感じる毎日です。

毎年、暦のうえで立秋を迎えると（今年は八月八日）不思議なくらいに寺の庭で、虫の聲が聞こえはじめます。最近は夜中に目が覚めると、うるさいくらいに虫の音の合唱です。元、大本山總持寺副貫首、余語翠巖御老師は、「春というものは絵に描くわけにはいかないけれども、梅の花を描けば春だと思う」と言われておりました。

鶯が鳴きはじめれば春を思うように、虫の音を聞けば秋と思うし、月と芒を描けば秋だと思います。

子供の頃は月といえば、兎の餅搗きやかぐや姫を思い浮かべたものでした。月見櫓があるお城も多く、殿様も秋の名月を楽しまられたことと思います。

従容録の第二則「達磨廓然」の頌で宏智禅師は『秋清うして月霜輪を転じ、河淡うして、斗夜柄を垂る』と書かれております。道元禅師様は「本来の面目」で『春は花　夏ほとどぎす　秋は月　冬雪さえて　すずしかりけり』と詠まれており、中国の禅僧、無門慧開も『春には百花有り　秋には月あり　夏に涼風有り　冬に雪有り　若し閑事の心頭に挂くる無んば　便ち是れ人間の好時節』と詠まれております。中国でも日本でも、秋と月は一体です。

高濱虚子の歳月記にも秋の季語の月を詠まれたものが沢山記載されております。

昨年の秋、月の美しい夜、境内に出て俳句の一つでもと思い、月を眺めていると、当季刊紙の「ボブの独り言」の愛猫ボブが、幸福そうな姿で庭石に横たわっているのに気が付きました。猫をいれた月の一句をと思いましたが、できずじまいでした。

今回、原稿を書くにおよんで句集を見ておると『草陰の猫もけしきや今日の月』（梅室）の句が目に止まりました。なる程、こんな風に詠めたらと昨秋の情景を思い浮かべました。

今月の中秋の名月（九月廿七日）には、日本の文化でもある「お月見」を家族一同で楽しみたいものです。

【日々精進(三十)】
今日先祖恩

近藤 真弘

お彼岸を前に、幾分か涼しさを感じる日も多くなってきましたが、8月の上旬は暑い日が続きました。そんな中、今年のお盆も、老若男女問わず、多くの方がお寺を訪れ、ご先祖様の恩に報いるため、お墓をお掃除し、お参りをされておりました。家族皆で来られる方も多く、小さなお子さんも小さな手を合わせ、お参りしている微笑ましい光景も随所で見受けられました。お盆というのは直接ご先祖様を感じる時期であり、多くの方がご先祖様のご恩を感じ、お参りされます。

ご覧になったことがある方もおられると思いますが、安善寺の本堂の前にある石に、ある文字が彫られています。それは「今日先祖恩」という文字です。この文字は安善寺にご因縁のある、長野県の故藤本幸邦老師のお言葉で、藤本老師が揮毫された文字を彫り込んだものです。

今日というのは言わずと、今いるこの日のことを指します。今でいう明日は当然のことながら、明日になると今日になります。我々は「今」という瞬間を繰り返し生きています。今を生きる我々には必ず過去、所謂、昨日はあります。しかし、明日は必ずあるとは限りません。すなわち今日という日を迎えることは当たり前のことではないのです。

自分のご両親、祖父母、そして数えきれない多くのご先祖様のお蔭で、我々は、命をいただき今の瞬間を生きています。今日という日を迎えることはとても有難いことなのです。

当たり前のことほど有ることが難しい、すなわち「有難い」ということに気付きづらいものです。

お寺ではお盆にお参りに来られた方に、「今日先祖恩」と書かれたライターをお配りしました。お盆のようにご先祖様を感じる時期以外でも、毎日このライターでお仏壇の蝋燭を灯していただき、ご先祖様から頂いた命で今日を迎えたられた有難さに感謝をささげていただきたい思いからです。

皆様も、是非毎日、毎日「今日先祖恩」を忘れずにいただけたらと思います。

尚、前号の季刊誌でご案内させていただきました、藤本幸邦老師の実話を元に制作された舞台「焼け跡から」が十月三十一日(土)に長岡リリックホールで上演されます。多くの方々にチケットをご購入いただきました。まだチケットの残部もございますのでお時間、ご興味のある方は、是非ご連絡ください。

二年続きの新盆

長岡市三ツ郷屋　笠井 文夫

私は、昭和三十四年生まれ、物心付いた時の家は農家で、父は勤め、母は専ら田んぼと畑、二人の子育てに一生懸命でした。

春は雪消えとともに田畑の作業が始まります。私が小学生までは、田植えの日は、手伝いの人が十人位で朝早くから作業をしてました。その頃の家は古い農家作りで、トイレは廊下の板場を抜け、外履きに履き替え、土間を歩き、牛小屋の前を通り用を足すような家でした。

そんな家も昭和四十八年には現在の家に建替え亡き父が自慢げに玄関の柱は安善寺の和尚さん(二十六世)から頂いた物だと言ってました。二十六世、二十七世とは年が新しくなると自宅でお経を頂き新年食事会を開いておりました。子供ながらにいっぱい酒をのむな～。因に、二十七世の奥様も迎えに来られた時にお酒を飲まされたと聞いています。

そんな父も還暦頃から糖尿病・高血圧・歩行困難を患い新年食事会も無くなったようです。その後も法事や寺の行事は父と母がやっておりました。

私が初めて安善寺の行事に出席させて頂いたのは、現副住職の結婚披露宴が最初でした。その後私の友人が市の選挙管理委員に選ばれ、話をしていると神田のお寺様もいらしゃると、それって近藤さん？　と聞くと何で知ってるが！　家の菩提寺らてえ！　驚いていました。普段お寺とは、あまり御付合いの無かった私ですが、そんなことから住職との話題ができたように思います。

母は、毎年畑の作業が始まると体調を崩していたようです。今年もそうかと思っていると、一向に回復せず昨年四月の末に病院から家族の方と一緒に来て下さいと言われ、「胃に癌ありますが、年齢と体力を考えると外科的治療は出来ません」と言われ、積極的治療を諦め、なるべく長く住み慣れた自宅で療養してもらうことになり、父には母の療養中までは施設に入居してもらい、四週に一回の父の通院もヘルパーさんにお願いし、私ら夫婦と子供三人で母の世話をし、六月十三日に往診に来て頂き十五日に入院、十八日に他界しました。

無事葬儀も終えたのですが、六月二十七日に父が誤嚥性肺炎で入院、七月十八日退院し、住み慣れた自宅で生活しておりました。父の世話は殆ど母任せでしたので、持病のある父の三度の食事は朝はワンプレート、昼と夜は、塩分・カロリー控えめの宅配の食事に果物を付けてという具合で、母が他界し父も何処か寂しそうでした。

いつも朝から晩まで二人でいた茶の間から自分の居間に引きこもり、食事と風呂以外は顔を出さなくなり、なかなか話し相手にもなってやれず寂しい思いをさせてしまいました。

年が明け今年の一月からは、周二回のデイサービスに行くようになり、少しは元気を取り戻した矢先、食べ物を喉に詰まらせ二月十七日に帰らぬ人となってしまいました。両親には本当に感謝しております。

父の葬儀の打合せを住職と行い、葬儀当日控室でご挨拶をしていると、お願いしたお寺様から、私の家内は中島の○○家から嫁いで参りましたと言われ、一瞬何のことか分らなかったのですが、すぐに私の祖父の弟の奥さんの実家だと分かり、出席していた親戚に紹介したところ、びっくりしていました。世間は狭いですね。

その後何日か経ったある日、私と家内はお昼の買い物で出かけた時、家からの電話で「お婆ちゃんと、若いお寺様が御参りに来られた」と言う連絡に、家に着きお顔を拝見し、中島の○○家のお婆ちゃんと、父の葬儀にお願いした寺の副住職だと分かり、いろいろなことをお話させて頂きました。

そういえば昨年の八月一日の安善寺での新盆の供養にいらっしゃいました。あの日も天気がよく暑い日でした。今年の八月一日は去年より暑かったように思われます。そんな二年続けての新盆、無事両親を送ることが出来ほっとしているところです。

御来光を求めて富士登山

長岡市花園東　小林　功

富士登山を成功させるためには、まず体力増強と思い、四週にわたり鋸山登山に挑戦した。人間、目標があると頑張れることを身をもって体験した。回を重ねていくうちに息も上がらなくなり、時間も短縮することが出来、今まで苦痛で「なぜこんなに難儀して…」と思わない登山はなかったが、今回は目標に向かっていることにより、そんな心は湧き起こってこなかった。

登山日一週間前から体調を整えるため早起き、食事に気をつけて万全な体調で当日を迎えた。仏壇に無事に登れるよう合掌、朝四時半、富士山を目指して車を走らせた。

この時間帯は高速道路もスムーズで、関東自動車道から圏央道を走り、バスに乗り換え富士スバルライン五合目に(二三〇五メートル)十時に着いた。

人ひとひと、外国人の観光グループの多さにまずは驚き、世界遺産になったことの効果か？　天候もまず心配ない。心なしか空気の薄さに不安を感じ始めていた。ここで朝飯と昼兼用の食事をとり、高ぶる気持ちを落ち着かせ、まずこの空気の薄さに慣れるためゆっくりと休息を取った。

六合目までの道のりは「これが富士山登山道か」と疑いたくなるほどの緩やかな勾配である。ここで急ぐと後が続かないのでゆくり、ゆっくり亀さんのように登った。予定通りのコースタイムで今のところ順調、七合目の山小屋目指してジグザグの坂道が続き、落石防止の壁が作られている。その脇を登って行き、抜けると岩場になる。ゴツゴツした溶岩の上を落石に注意し慎重に登ります。今日このコースで一番難儀な厳しいところです。

息が上がり酸欠状態で頭が少しずつ高山病の症状になり、しばらく小屋で休むことに。酸素ボンベで体に酸素を補充したら頭の痛みも治りました。ゼリー状のサプリメントのお世話にもなりました。胃にもたれず栄養補給が抜群で調法な物に感謝。

今日の宿泊の山小屋を目指し出発。山の下では「ゴロゴロ」と雷の音がしだした。きっと下界では夕立かな？　初めて自分より下で雷が鳴る現象を経験してみた。御蔭で山頂付近では雨も降らずにやっとのことで八合目の山小屋に午後六時に辿りつくことができひとまず安堵。

夕食はハンバーグカレーで、それは質素なものでした。お茶は二杯目から有料で、なんでも山小屋には売っている。ちなみにホッカイロ、靴下、あんパン、カップヌードル、お汁粉、水など、お金を持っていれば不自由なし。しかし、値段は市販の三倍以上と高い。それを覚悟していけば身軽に登れる。ちなみに二日間でトイレ使用料千五百円程度使った。

小屋での宿泊は思ったほど窮屈ではなく、疲れていたことも相まって睡眠をとることができました。トイレは別棟にあり、真夜中外を歩いてにトイレに行った時の星の輝き、関東一円の夜景、登山者のヘッドライトの光がジグザグ切れ目なく続き、天の川を見るようで、この世でないような絶景を見ることができた。

午前二時、山頂目指して山小屋を出ると人で足の置場がないほど大渋滞の中、ヘッドライトを頼りに岩場、砂礫を自分の足の置場を確保がやっとのような牛歩で山頂に三時半に着きました。

御来光のスポットの成就岳に陣取り御来光をまちました。山頂は真冬並みで氷点下一度程度でホッカイロ四枚貼って防寒着を着ても「ぶるぶる」の状態で待つこと一時間余、四時半頃から東の空の雲海の中からオレンジの光が広がり、真っ赤な太陽が顔を出した瞬間は涙が出るほどの感動に包まれ、あちこちで「万歳、万歳」と歓声が聴こえた。太陽は万物にエネルギーと希望を与える光明を持っていることに改めて感謝。お釜巡りは体力温存のため行かずに下山。道は砂礫で埃だらけでマスクをして下山した。

標高差一四五〇メートル、往復距離約一四キロメートル、要した時間約十二時間の富士登山に成功。自宅に無事帰って来たことを仏様に報告し、自宅での安楽の睡眠を取ることができ、幸せの気分を満喫しました。

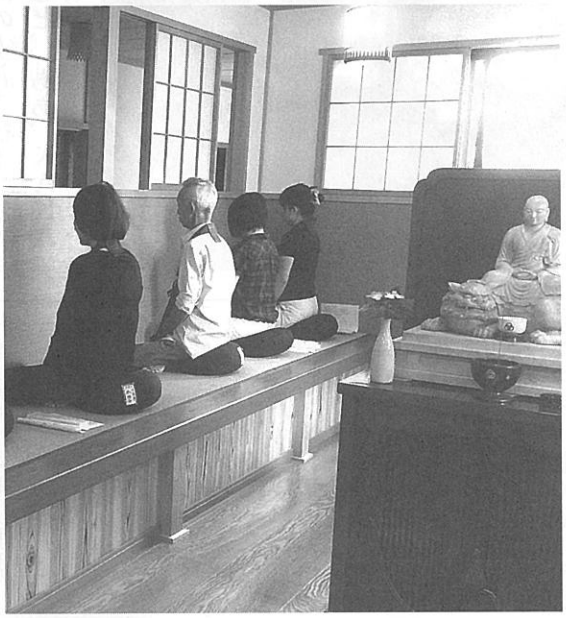
坐禅会のありがたい時間

瀬戸民枝

朝五時半過ぎ、朝ご飯の支度など手早く済ませ、急いで自宅を出ます。自宅の水道町から安善寺様まで約1km。歩いてもいい距離ですが、坐禅を終えるとそのまま出勤するので、車で向かいます。

お寺に着くとお経が始まっており、来た方から本堂に集まります。坐禅は基本的に四月から十二月の毎週火曜日朝六時からですが、その前に本堂で読経があり、お経本を見ながら声を合わせて読経させていただきます。住職、副住職の張りのある声と、一定のリズムで滑らかに唱えられるお経は、いつ聞いても心地よく、このお経だけでも、ありがたみを感じる貴重な時間です。

私が安善寺様に坐禅で通うようになって二年半。前から坐禅会に通っている知人に教えていただいたのがきっかけで、是非にと頼んで参加させていただくことになりました。

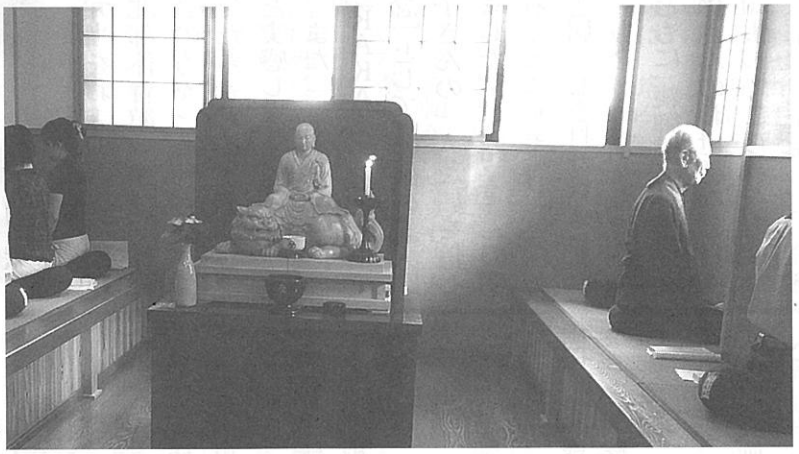


実は、以前まだ学生の頃、数ヶ月間、他のお寺で坐禅を体験したことがありました。その後、就職や結婚で続けることはできませんでしたが、心のどこかでまた坐禅をしたいという思いは続いていたのだと思います。たまたま話題が坐禅になり、またできる、しかも自宅からすぐ近くだということに驚きました。ただ、その時は冬のお休みの期間で、再開される四月が待ち遠しかった記憶があります。

なぜ坐禅に興味があるのか、どうしてこれまで続けてきているのか、私自身よくわからないこともありますが、お寺が好きなのだと思います。お寺の持つ雰囲気が日常の生活空間とは別世界で、厳かで、そこにいるだけで心が洗われるような、そんな気を感じる空間だからなのだと思います。

それとまた、私は小さい頃から良く亡くなった祖母にお寺に連れて行かれていたからかもしれません。信心深い祖母は良く私を連れて、あちこちのお寺に出かけていました。子供にとって、お寺はおもしろい場所ではありませんが、小さい頃、いろんなお寺に連れていかれた原体験が、自分にとってはなじみ深いものとして心に残っているのかもしれません。

朝の読経が終わると本堂から場所を移動し、身支度を調えてから坐禅堂に入ります。情報誌などの記事を見て体験に来る方もあり、十四・五名分の席が時には満席になることもありますが、いつもだいたい十名前後の方達が参加されています。私はまだまだ日が浅いのですが、長い方は十年、二十年以上という大先輩がたくさんいらっしゃいます。



坐禅会の歴史は長く、聞けば戦前からなのだそうです。戦前は安善寺様と堅正寺様くらいでしたが、今では数多くのお寺で実施されているとのことです。坐禅の後には奥様がおいしいお茶を出してくださいます。誰でも自由に参加できる坐禅会をご家族皆さんで長年続けていらっしゃることに、敬意を感じます。素晴らしいですね。

坐禅をすることの効用は色々あるのだと思いますが、何も考えずに姿勢を正して、黙って、ただ座る。ありがたい時間をいただいています。感謝。

KAKA笑の会にご参加ください

高橋 とも子

皆様、安善寺「KAKA笑の会」をご存知でしょうか？ 平成十五年七月二十五日に第一回「ハーブティとチェロを楽しむ夕べ」と題した催しをスタートに、安善寺内外の方々と交流して楽しい一時を過ごす会です。

スタート以来、叙情歌を楽しむ夕べやジャズコンサート、五大路子さんの一人芝居など、いろいろな催しをお手伝いさせていただきました。

会員も少しずつ増え、友人に「貴方の家の菩提寺は？」と質問され、「神田の安善寺様よ」と答えると、「ああ、KAKA笑の会のお寺様ね」と言われます。

スタート時は七～八名でしたが、現在は十四名で活動しております。当初はお嫁さん年代の方々にお声掛けしてメンバーに入っていただきスタートされたと聞いております。

個人的ですが、私の一番の思い出は大本山總時寺様より典座和尚様をお招きし、精進料理をご指導いただき味わう会を催したことです。思いがけない材料を使って、見た目も美しく且つ美味しく、心が洗われる気持ちで精進料理作りをお手伝いし、会員一同目を見張り、また感動したりの連続でした。もちろん会が終了後、会員一同で美味しいくいただきました。

そこで昨年は、会員だけで自分の創作料理を（一応は精進料理のつもり）を持ち寄り、アイディアを出し合い、「旬のお料理の会・五十食」と題し、皆様に召し上がっていただきました。この時の会員の方々の一品一品のアイディアに感心し、自分の生活の彩りになれたらと、普段のワンパターンメニューの食生活を考える機会にもなりました。

それから二十三年四月と五月には東日本大震災の長岡避難者への炊き出しにも参加させていただきました。二百食近いお弁当をお寺の厨房で作り北部体育館へ運び、避難者の方々とふれあい、自分たちも人ごとではないと実感しました。

また、二十五年九月には「KAKA笑の会十周年記念」として、女優の五大路子さんの一人芝居を催しました。五大路子さんの明るくエネルギッシュなお芝居に心を打たれました。

当会員の方々も皆さんともに、親御様の介護やお孫さんのお世話など日々頑張ってこられた方々です。折々に集まっての会議と称してのお茶会も楽しみの一つでもあります。

今年の十月二十四日に旬のお料理の会をご案内いたします。普段はお寺にあまり足を運ぶ機会のないお嫁さん、お孫さんもどうぞ味わっていただけませんか？ もちろんお父さん達もお待ちしています。

旅立ち

（平成廿七年七月～八月末日まで）

小林二三夫様　七月八日寂
長岡市東坂之上

●

笠井エルザ様　七月十四日寂
柏崎市

●

丸田　清様　八月二日寂
長岡市西千手

●

山田　照子様　八月九日寂
長岡市

●

中林　實様　八月三十一日寂
長岡市中島

ご冥福をお祈りします。

句歌 愁灯

［三十六話］

「自動車ショー歌」

加瀬由紀子

とある会合でご一緒する北陸学園の学園長・加藤武氏。彼は、様々な分野でエネルギッシュなパワーを発揮しており、長岡市の将来を担う若き企業人としても著名だ。

厳格な校風を守って礼儀正しい生徒さんたちを見れば、学園長の指導力に納得がゆく。

宴会などのオープンな場のカラオケで、彼が披露する曲に、小林旭の「自動車ショー歌」が楽しい。

昭和三十九年作の歌詞には、往年の名車が多数入っている。「パッカード、ミンクス、コンテッサ、ベレット、ヒルマン、デボネア…」

それぞれの車のわかる人は、ある程度の年代…いいえ、車大好きの人、ということにしておこう。

余談だが、その亜流として出来た替え歌に、所ジョージの「タバコ唱歌」があるのをご存知だろうか？ 調べたので笑って読んで下さい。少々品格ダウンで、失礼しますが。

『♪セップンスターいと迫ってゆけば ポールモールを蹴り上げるしんせいな場所を蹴られたひびきで ゴールデンバットがハイライト 涙がマルボロ、ウィンストンあさひ（浅い）ケガでもジタンばたん 富士（不治）の病でダンヒル（ダウン）ね…』

（ ）は解説。

私が免許を取得したのは、大学一年の夏休みだった。仮免許路上講習で、バスを追い越し、教官からこっぴどく叱られたのを覚えている。法学部だからと、法規の本も読まずに試験を受けて、こちらも落第。再受験。

免許証が来て一週間後、父の車を借りて倉敷まで出かけ、縦列駐車に三十分もかかったこともなつかしい思い出だ。

車好きの父の影響もあって、車との付き合いは長い。一時はのめり込んで、友人の改造車でレースやラリーに参戦。

ラリーの練習で、一日五百キロ、一年間十万キロ近く走り、中古のブルーバードを廃車にして父に意見されたこともあったが、今は、ガソリン代がかからないハイブリッド車や自転車をおとなしく運転している。

昔取得したレースのライセンス、もはや骨董品？

最近、高速道路で逆走車に出会った。何事もなく通り過ぎたが自分が注意していても、避けられない事故も多いご時世、ともかく安全運転に努めている。

町の照明が明るくなったせいか、夜間の無灯火車両も増えて危険だ。何より多いのは、サイドミラーが合っていない車の多さに驚く。先日など、サイドミラーを折りたたんだまま走っている車を見かけた。後ろを見ないからなのか、あまりにも合理的過ぎる！と感心している場合ではない。

一台分のスペースがなくても割り込んでくるネパールや東南アジアの国々ほどではないが、都心や関西方面を走っていると車間距離を詰め、追い越しや追い抜きも激しい。

その点、新潟のドライバーは「我が道を往く」のんびり運転で逆に危ない。空気を読んでキビキビ運転してほしい、と思いながらも、近い将来私もその仲間に入ってしまうのかもしれない。

運転をされる読者の皆さん、車社会をこれからどう生きるか、ちょっと考えてみてください。

我が赤い愛車・ルイガノMV1（カナダ製）

怨が怨に対して為し、敵が敵に対して為す處は如何なりとも、邪に向かふ心の造る害悪に若くものなし。『法句経』

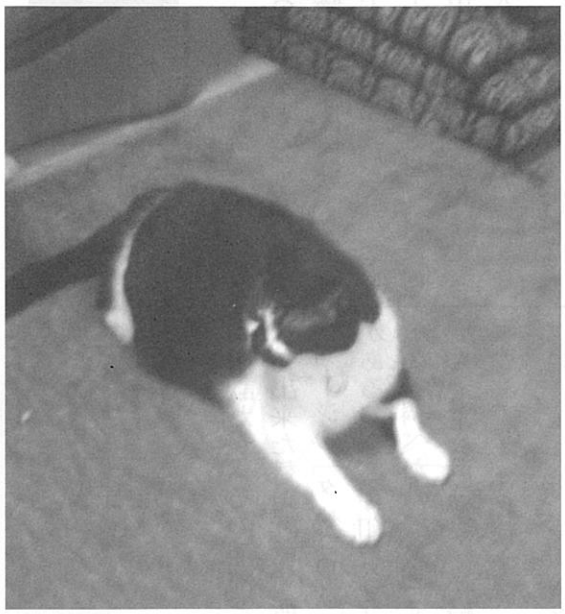
第七十二号、新年号は平成二十八年一月一日(金)発刊予定です

ボブの独り言

成長は嬉しいもの！

ボブの独り言

何時の間にか、日中でも蝉時雨に代わって、秋の虫の音が聞かれるようになってきました。例年に比べると、今年は蟬が多かったのでしょうか？午後八時頃に懐中電灯を持って庭に出て行った副住職と真人君「見てみて此処にもいるよ！　この蟬は羽が白いよ！」と言う歓声が何度も聞こえて来るくらい、穴から出て来るところから、羽化する様子があちらこちらで見られました。まるで蟬の誕生のショーを見ているように、夜の庭は幻想的な雰囲気に包まれていました。



お彼岸を迎える頃になったら、本当に涼しくなり、あれだけ稼働していた扇風機が「疲れたので、早く綺麗になって休みたい」と、言っているようにみえます。本当に暑い夏でしたね！

今まで、自分の道を模索し続けていた一番下のお兄ちゃん、一大決心して昨年の十一月から、頭をまるめて越前市の修行道場の門を叩きました。それから十ヶ月、今年のお盆に安善寺の本堂で住職・副住職と共にお盆の行事を手伝っていました。

そんな様子を、久美さんが、周りに遠慮しながらビデオカメラを回しているではありませんか。まるで息子の成長を見守る母親のような姿に、バーバーが感無量の様子がとても印象的でした…。

夕食の時に皆でそのビデオを見ながら、親は何歳になっても子供の成長が嬉しいものなのでしょうか？　住職もバーバー同様に感慨深そうに見えたのは私だけではなかったようです。

九月十日からは、修行の場を大本山聰持寺に移して残りの修行が続くようです。私や先代のペコも本当に可愛がってくれたお兄ちゃんなので陰ながら「頑張って！」とエールを送りたいです。

同様に、半年で大きくなった「ももちゃん」も今年中には訓練に行くようです。私も楽々とみんなの処で過ごせそうで、嬉しいです。

ニャ～ン

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。
ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- ●思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- ●私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- ●教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。
- ●嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

編集雑感

今日はおめでたい話を書かせていただきます。

この季刊紙の編集委員をされている高橋利春さんが今年四月二十九日黄綬褒章の栄誉に与りました。農業、商業、工業等の業務に精励し、他の模範となるような技術や事績を有する方に対し授与されるものだとお聴きしております。土地家屋調査士の業務での貢献が対象とされていますが、高橋利春さんはそれだけでなく、いろんな業務に携わっておられ、それらも含め社会への貢献は大変なものがあると思います。

編集委員会としても大変誇りに思うところです。

ご本人の弁によりますと五月一五日に皇居へ参内され天皇陛下よりお言葉を戴いたこと大変感激をされ、これも皆「かあちゃんがいるおかげ」と奥様に感謝されておられました。奥様も安善寺「KAKA笑の会」に参加され、活躍いただいておられます。こちらも旦那様へ、安善寺へ大変大きな貢献を戴いております。併せてお祝いしたいと思います。

私の子供も結婚して配偶者がおりますが、若夫婦の会話を聞いていると、夫婦同士で「ありがとう」の言葉がやり取りされます。夫婦の絆には大切な言葉なのだと思うのですが、私は何時も感じています（本当です）が、口にすることがありません。いや出来ませんと云ったほうが正しいかもしれません。それではいけないと思いつつも、いつか言葉に出来る日が来るでしょう。息を引き取る直前になってしまうかもしれませんが…。

高橋　潔